

公開シンポジウム
「社会による子育てを目指して—大学の貢献を考える—」

「大学も子育ての担い手—ソーシャル・パタゴジーの一翼を担う—」

日時:2016年12月11日(日)13:00~15:30

場所:甲南大学18号館3階講演室

企画者:森 茂起(甲南大学文学部)

講演者:北川 恵(甲南大学文学部)

前田 正子(甲南大学マネジメント創造学部)

伊藤 篤(神戸大学発達科学部)

入江 武信(兵庫県健康福祉部こども部)

太田 貞夫(神戸新聞パートナーセンター)

「社会による子育て」を人間科学研究所の研究・実践事業の柱に位置付けるためのシンポジウムを開催した。

まず、前田正子先生(少子化・子育て支援・自治体経営)から、現在の日本の少子化、子ども・子育て事情の概観と、大学における学生を対象とする「子育て」(自立支援)および子育て準備教育の課題について話していただいた。大学において地域の子どもおよび親を対象に子ども・子育て支援実践に携わってきた、伊藤篤先生(子ども家庭福祉論)、本学の北川恵先生(臨床心理学)は、それぞれの先生が展開されてきた広場型実践および臨床心理学的実践を紹介され、大学ができる子育て支援実践のあり方を示された。行政の立場からは、入江武信氏が、少子化を含む兵庫県における子どもをめぐる課題をふまえて、大学との連携事業にふれながら、兵庫県の子ども・子育て支援事業を紹介された。最後に、太田貞夫氏が、神戸新聞が取り組んでいる子ども・子育て支援の諸事業と、甲南大学も参加している大学との連携事業を紹介し、地域に密着したマスコミの役割と大学への期待を述べられた。



少子化が進む中で、重要な課題は、数的目標の追求だけでなく、あるいはそれ以上に、子どもが育ちやすい、子どもを育てやすい社会を実現し、子どもの育ち、子育ての質を向上させることと思われる。そのために、甲南大学も、子ども・子育て対策に関わる大学内外の研究者・実践家の知識、技量を生かして、地域の子ども・子育て支援に貢献していくことが求められる。シンポジウムの議論を通して、人間科学研究所を核としてその役割を果たしていくために課題の整理と事業の展望を行うことができた。

(文責:森 茂起)

シンポジウム

アート活動を学校から地域へとつなげるために
(連続公開講座「アートと発達支援—学校から地域社会へ—」Vol.3)

日時:2016年12月18日(日)13:00~15:30

場所:甲南大学18号館3階講演室

講師:大槻 和浩(兵庫県立こやの里特別支援学校教頭)

桑田 省吾(神戸市立本山南小学校そだちここの教室主幹教諭)

新川 修平(特定非営利活動法人100年福祉会 片山工房理事長)

棕田 三佳(美術家)

大西 彩子(甲南大学文学部准教授・人間科学研究所兼任研究員/臨床心理学)

服部 正(甲南大学文学部准教授・人間科学研究所兼任研究員/芸術学)

甲南大学人間科学研究所が今年度から着手した研究教育プロジェクト「アートと発達支援—学校から地域社会へ—」の一環として、学校や福祉事業所で発達障がいのある方々の支援に携わってられる専門家を招いてシンポジウムを開催しました。アートを通じた発達支援の可能性について、また、教育現場での支援活動



を成人の福祉事業所での活動とより滑らかに接続するために取り組むべき課題などについて、小学校と特別支援学校高等部で長年にわたって支援教育に取り組んでこられた桑田省吾氏(神戸市立本山南小学校そだちここの教室主幹教諭)と大槻和浩氏(兵庫県立こやの里特別支援学校教頭)に加えて、神戸市内で障がいのある人の創作活動に特化した福祉事業所を運営している新川修平氏(特定非営利活動法人100年福祉会 片山工房理事長)、美術家として芸術療法としてのアトリエ活動に造詣が深い棕田三佳氏をお招きし、実践現場での具体的な事例の紹介を交えながら、豊富なご経験に裏打ちされた専門的見地からご提言をいただきました。さらに後半のシンポジウムでは、企画者である人間科学研究所兼任研究員二名(大西彩子、服部正)も加わって、発達障がいのある方の創作活動の年代ごとの適切な支援のあり方や評価などについて意見交換を行いました。また、本シンポジウムでは、今後の研究プロジェクトの推進のために効果測定のアナケート調査も併せて実施しました。

(文責:服部 正)

これからの活動

公開研究会

「マルチメディアDAISY教科書と、学習障害への支援」

日時:2017年3月1日(水)14:00~15:20

場所:甲南大学18号館2階演習室2

講師:野村 美佐子(日本障害者リハビリテーション協会)

司会:川口 茂雄(甲南大学文学部)

コメンテーター:服部 正(甲南大学文学部)

大西 彩子(甲南大学文学部)

赤瀬 美穂(甲南大学文学部)

甲南アトリエ

「第5回親子孫子で楽しむアート
—和紙や布を染めてみよう」

日時:2017年3月12日(日)10:00~12:30

場所:甲南大学18号館3階講演室

講師:棕田 三佳(美術家)

企画:内藤 あかね

(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)

公開研修会

第14回KIHS心理臨床ワークショップ

「HOMEの実施方法を学ぶ
—児童養護施設における子育て環境評価—」

日時:2017年3月19日(日)10:00~17:00

場所:甲南大学18号館3階講演室

講師:森 茂起(甲南大学文学部・人間科学研究所/臨床心理学)

助言者:水木 理恵(甲南大学大学院)

共催:甲南大学心理臨床カウンセリングルーム

発行年月日:2017年3月10日

編集後記

研究所の様替えと書籍整理を行い、『子育てライブラリー』を開設しました。今年度は学内者のみの利用ですが、今後、一般向けの公開を目指していく予定です。さらにコンテンツの充実にも努めて参ります。今年度からの第五期の活動開始に伴って、研究所ホームページの内容を更新しました。KIHSの研究活動にご関心をよせて頂くとともに、活発なご意見を頂けることを期待しています。



活動報告

●2016年度の活動

シンポジウム 「精神分析臨床に哲学をどのように役立てるのか」

日時:2016年4月29日(金・祝)10:00~16:00
場所:甲南大学18号館3階講演室
企画:富樫 公一(甲南大学文学部教授/NY州精神分析家)
通訳:富樫 公一(甲南大学文学部教授/NY州精神分析家)
葛西 真記子(鳴門教育大学大学院教授)
シンポジスト:ロジャー・フリー(サイモンフレイザー大学教授)
森 茂起(甲南大学文学部教授/臨床心理士)
西 欣也(甲南大学文学部教授/哲学)
主催:甲南大学富樫研究室
共催:甲南大学人間科学研究所
一社)日本精神分析的自己心理学協会

人間科学研究所は、甲南大学文学部の富樫研究室主催で行われたシンポジウムに共催として協力しました。精神分析は臨床的な営みです。技法や理論が優勢だという批判、臨床実践効果としての精神分析に疑問を投げかける声はいまだに少なくありませんが、欧米における精神分析は90年代以降、すでにそのような批判を超え、新たな潮流を生み出しています。精神分析のパラダイムシフトといわれるそういった潮流は、乳児研究や愛着研究、臨床実証研究、神経科学、哲学、トラウマ研究などの知見と対話し、それを取り入れ、影響を与えあいながら今も発展しています。このシンポジウムでは、人間が生きる苦悩に直接向き合う精神分析臨床において、哲学的知見をどのように活用できるのかについて、カナダのサイモンフレイザー大学教授であり、かつ米国で長い歴史を誇る精神分析の研究所「ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所」のスーパーバイザー及びファカルティでもあるロジャー・フリー氏を招聘し、講演いただきました。講演では、ヨーロッパ哲学の歴史の概観と、哲学的知見が米国で急速に発展する関係論的な精神分析に与えた影響が紹介されて、その内容をもとにして、臨床心理学の立場から森茂起氏、哲学の立場から西欣也氏に指定討論をいただきました。およそ40名の専門家や学生に参加いただきましたが、精神科医、臨床心理士、福祉職、哲学者など、様々な立場の形にご参加いただき、学際的で活発な議論が行われました。(文責:富樫 公一)



シンポジウム 発達障がいの子どものアート活動がもたらすもの (連続公開講座「アートと発達支援—学校から地域社会へ」Vol.1)

日時:2016年6月4日(土)13:00~14:30
場所:甲南大学18号館3階講演室
講師:大西 彩子(甲南大学文学部准教授/臨床心理学)
内藤 あかね
(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員/芸術療法)
服部 正(甲南大学文学部准教授/芸術学)



甲南大学人間科学研究所では、地域の子どもたち、とりわけ発達に問題のある子どもが気軽に参加できるような美術教室の将来的な開設を目指して、研究と教育の活動に着手します。「アートと発達支援—学校から地域社会へ」をテーマとするこの研究教育プロジェクトの立ち上げにあたり、プロジェクトの中核を担う研究員による公開講座を開催しました。

今回の公開講座では、アートを通じて発達支援の可能性について、また、大学がそのような活動に関わることの利点と課題についてなど、このプロジェクトを充実したものとするために必要なことを検討しました。広汎性発達障がいの子どもの絵画の特徴や魅力、子どもとアートセラピーがもたらす効果、子どもたちの創作活動を社会がどう支援していくかなどについて、小中学校の支援教育、芸術による療育活動、障がいのある人の創作物の芸術的評価などの観点から意見を交わしました。(文責:大西 彩子)

公開講座

第7回 お父さん・お母さんのための子育て応援講座 「子どもの安心基地になるために」

日時:2016年6月30日(木)10:30~12:00
(受付開始10:00~)
場所:甲南大学18号館3階講演室
講師:北川 恵(甲南大学文学部・人間科学研究所/臨床心理士)
スタッフ:岩本 沙耶佳(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)
甲南大学大学院生・学部生2名
参加者:16名

本研究所主催で2010年度から毎年開催してきた「お父さん・お母さんのための子育て応援講座」は、今年で第7回目となりました。誰にとっても、どんなことをするときも、信頼できる人が見守り支えてくれることが大切です。子どもにとっては、お父さん・お母さんが「安心の基地」です。そうした関係を育むためのヒントをお伝えする講座です。託児も利用可能で、お父さんと少し離れてリフレッシュできる機会にもなっています。これまで、東灘区・西宮市・神戸新聞社などの後援を受けながら、幼稚園・保育園・小児科などに講座開催のお知らせをしてきました。今年は、神戸新聞子育てクラブ「すきっぷ」にも協力いただいで開催できました。講座を受けて、さらに子どもとの関係を振り返りたいと思っただき方方には、本研究所で行っている「親子がホッとつながるグループ」(8~12月、毎週木曜日)にも参加いただきました。子育ては楽しいけど大変なときもあります。お父さん・お母さんにも「ホッと」していただいで、お父さんに安心感を届けていただけたらと願っています。(文責:北川 恵)



講演会

「別の視点:アメリカにおけるアートセラピー—何がそうで何がそうでないのか?」 (第8回 KAATsg研究会[甲南アーツ&セラピー研究会])

日時:2016年6月11日(土)10:00~12:00
場所:甲南大学18号館3階講演室
企画:内藤 あかね(甲南大学カウンセリングルーム相談員)
講演者:Mercedes Ballbe ter Maat
(Nova Southeastern University心理学部准教授)
共催:甲南大学人間科学研究所



2016年6月11日(土)にメルセデス・テルマート先生(Mercedes Ballbe ter Maat, Ph.D., LPC, ATR-BC)をお迎えして、講演会を行いました。アメリカのアートセラピスト団体としては最大のAmerican Art Therapy Association会長を勤められたことある先生は、現在故国のアルゼンチンとアメリカの両国を行き来しながら国際的に活躍ですが、そのネットワークの軽さが反映した明快なレクチャーで、会場は終始和やかで楽しい雰囲気でした。先生が講演の冒頭、参加者一人ひとりに自己紹介を求められたので、会場にアートセラピーを学んだり実践したりしている人、隣接領域で活動している人、教育者、学生と関心の高い方が出席とわかり、コーディネーターとしても非常に嬉しい集まりとなりました。講演の第一部では、アメリカで行われているアートセラピーの概観、すなわちアートセラピーの定義と様相をお示しいただき、アートセラピストがプロフェSSIONナルとしてどのような考え方を基準として活動しているか、どのようなトレーニングを必要とされているかなど、簡潔にわかりやすくご講義いただきました。第二部では、先生が実際にかかわられたアートセラピーの事例をいくつかご紹介いただきました。第一部の講義で、アートを介在させる利点の一つとして、意識のフィルターを通り抜けて描き手(の心理)が表れやすいことが挙げられていましたが、それが非常によくわかる描画の数々を見て、先生の解説を聴き、会場の参加者もアートのパワーを感じられたことでしょう。今回の事例はすべて子どもだったこと、ヒスパニック系と思われる事例の作品があったことから、言語能力が十分でない子どもや母国語ではない言語文化で生活する人に対して、アートセラピーが有効になりうるということが示唆されていました。加えて、クライエントの無意識の表現を汲み取り、コミュニケーションによってセラピーにつなげていくのが、アートセラピストの役割であることも学んでいただけたと思います。

2時間の講演時間を超過しながらも、テルマート先生たつての希望で、実際に描画する機会もありました。課題は「橋を描く(Bridge Picture)」で、ある場所から別の場所へと渡る橋をイメージして描くよう求められました。短い時間でしたが参加者はパッと描画に取り掛かり、集中して作品を仕上げました。橋は「移行(transition)」のメタファーでもあるので、テルマート先生は「自分

は絵の中のどこにいるのか考えてみましょう」、「タイトルも付けてみましょう」と呼びかけられました。全員が輪になって自分の作品を掲げ、一つとして同じ橋はないことを確認した後、「絵を見て驚いたことがありますか?」、「絵を見て自分について学ぶことがありますか?」という質問に各自作品と制作プロセスを振り返りました。一部の参加者が積極的にシェアしてくださったおかげで、アートのパワーを確認できるシェアリングの時間となりました。(文責:内藤 あかね)

※本事業は、JSPS科学研究費助成事業(課題番号25284046)「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。

公開研究会

「Pavlovの条件反射と心理学」 (第1回条件づけと学習の研究会)

日時:2016年6月11日(土)10:00~12:00
場所:甲南大学18号館3階講演室
企画:沼田 恵太郎(甲南大学人間科学研究所博士研究員)
講演者:宮田 洋(関西学院大学名誉教授)
共催:甲南大学人間科学研究所

「パヴロフの犬」の言葉で知られる古典的条件づけの研究は、恐怖症や不安障害などの心理臨床とも密接に関わっています。例えば、エクスポージャー(暴露法)と呼ばれる介入技法は「条件づけの消去」とみなすことができ、近年は心理学だけでなく、神経科学の枠組みでも生起メカニズムについての研究が進められています。本研究会では学習心理学・生理心理学がご専門の宮田洋先生(関西学院大学名誉教授)をお招きし、イヌや人間を対象とした古典的条件づけの実験についてご紹介を頂きました。具体的には、留学先(ポランド・ネツキー実験医学研究所のコンルスキー研究室、消去理論でも著名)のイヌの実験経験のほか、関西学院大学で展開された人間の試験経験、条件づけと実験神経症、ストレス、パーソナリティとの関連についてもお話頂きました。「名人芸」で知られる熱のこもったご講義は、米寿になられた今でも健在です。ご講演後は私たちの身の回りにおける「条件づけ」についてのご紹介、携帯電話(スマートフォン)を用いた生体反応の測定ワークショップ(体験学習)も行われ、非常に充実した研究会となりました。(文責:沼田 恵太郎)



公開研究会

「障がいのある人の創作活動—実践の現場から」

日時:2016年9月17日(土)10:00~17:00
場所:甲南大学3号館324教室
司会:服部 正(甲南大学文学部准教授、人間科学研究所兼任研究員)
話題提供:金武 啓子(西淀路希望の家美術部代表)
宮本 恵美(工房集管理者)
指定討論:大内 郁(元薬工ミュージアム学芸員)
沼田 里衣(大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員)



近年、障がいのある人の創作活動に対する関心が高まっています。そこには、創作物を芸術作品として評価し、芸術批評の枠組みの中で理解するという取り組みもあれば、東京オリンピック・パラリンピックに向けた障がい者の文化活動の支援という視点からの取り組みもあり、関心のあり方は様々です。本研究会では、障がい者福祉事業所での創作活動、とりわけ造形芸術の制作と発表において先進的な取り組みを続けている二つの施設、工房集(さいたま市)と西淀路希望の家(大阪市)で指導的役割を果たしておられる宮本恵美氏と金武啓子氏をお招きし、それぞれの施設での実践活動についてご報告いただきました。さらに、障がいのある人の創作活動の発表に関する実践的活動と研究を行っておられる沼田里衣氏(大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員)と大内郁氏(元薬工ミュージアム学芸員)をコメンテーターとしてお招きし、発表の場面で留意すべきことなどについて意見をお聞きしました。続いて、企画者である筆者も加わり、創作の現場と美術館や劇場などの発表の場における障がいのある人とその関わり方の相違や、創作の現場と発表の現場の温度差、それぞれが相手に期待することなどについて、意見の交換と討論を行いました。会場からの質疑応答でも活発な議論が展開されました。(文責:服部 正)
※本研究会は、科学研究費助成・基盤研究(C)「障がい者の創作活動の美術的評価手法の確立」(代表研究者:服部正、課題番号26370121)の助成を受けて開催されたものです。

甲南アトリエ

「第4回親子孫子で楽しむアート—和紙で造形してみよう—」 (連続公開講座「アートと発達支援—学校から地域社会へ」Vol.2)

日時:2016年10月9日(日)10:00~12:30
場所:甲南大学18号館3階講演室
講師:椋田 三佳(美術家)
企画:内藤 あかね(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)

2016年10月9日の日曜日、このワークショップを第1回目からご指導いただいでいる美術家の椋田三佳さんとともに第4回目を開催しました。今回もこれまでに引き続き和紙をメインの素材とし、和紙を土台に巻き付けたり、破ったり何枚も重ねたりして手のひらサイズのキャンドル型LED電灯やワイヤーと組み合わせて構成する造形を試みました。家族連れから単独での参加まで、年齢も小学生から高齢者までとバラエティに富んだ計16名の面々にご出席いただき、和やかに創造的な時間をともに過ごしました。



制作に取り掛かる前に椋田さんがいくつか和紙の特徴とそれを活かした技法を紹介されたので、参加者はスムーズに画材を選択し、造形を始められたように見受けられました。分業しながらコミュニケーションをとって制作を進める家族、黙々と各自の作品に打ち込む親子、一つのイメージからまた別のイメージが生まれていくつも作品をつくった子ども…いろいろな制作スタイルがありました。最後のシェアリングでは、黒い布を机に敷いてその上に作品を広げ、一人一人の感想を伺いました。花ないし花びらの重なりのようなイメージの作品が多くありましたが、色や重ね方の違い、切込みの入れ方や紙の種類の違いで、各々表情のまったく違う作品になっていました。短い時間にパーツをいくつも作って構成された作品、遊園地のようなイメージな作品、ワイヤーを使った動きを感じさせる作品などもあり、作者の制作プロセスを聞いて感心の表情を浮かべる参加者もおられました。普段扱わないような素材を使って、無から有を形成する体験ができることが、このようなアートワークショップの一つの醍醐味ですが、それを個人として、家族として、そして一期一会の人間関係の中で味わえることも素晴らしい体験の一つであると感じられた時間となりました。当日、このような場をつくるのにご尽力いただいた椋田さん、若い川田ゼミ門下生のスタッフには大変感謝しています。(文責:内藤 あかね)

公開研究会

「リアルはいかにして、アートを精神医療に導入したか」

日時:2016年11月11日(金)16:20~19:30
場所:甲南大学18号館3階講演室
企画・司会・通訳:三脇 康生(精神科医/仁愛大学人間学部教授)
講演者:Massimo Marsili(精神科医/リアルWHO協力機構所員)
Jean-Luc Roelandt(精神科医/リアルWHO協力機構所長)
共催:甲南大学人間科学研究所



フランスでは通例のセクター制度—病院を確保しその周りに病院外施設を充実させるという動き—とは異なる動きをしたリアル東セクターでは、病院への入院患者がほとんどいなくなったとされています。その背景について、2014年9月に聞き取り調査を行いました。その結果、以下の点が明らかになりました。
1. ジャンリュック・ローラン氏が代表を務めていたリアル東セクターへと、イタリアの精神病院の全廃運動の先頭に立ったバザーリアとその改革チームを、1978年にイタリアのトリエステから招聘したこと。
2. リールの産業自体が停滞したこと首都、アートを街づくりの根拠に据えたこと(このことは2004年の欧州文化首都に任命されたことに結実しています)。また、病院を解体するに当たりアートの活動を容易に地域医療へ導入できたこと(これは精神医療の常識を常に現象学的にカッコに括り、精神分析的に精神医療システムへの過剰な転移を分析できることを意味します)。これらの情報の詳細を聞き取るため、リアル東セクターの改革を担ってきたジャンリュック・ローラン氏と、2010年からトリエステからリアルへ移動して精神科医務めるマッシモ・マッシーリ氏を招聘し、2016年11月1日に公開研究会を甲南大学人間科学研究所で開催しました。(文責:三脇康生)
※本事業は、JSPS科学研究費助成事業(課題番号25284046)「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。